

近世中期における身延山信仰と信仰圏

望 月 真 澄

はじめに

身延山久遠寺が、日蓮廟所がある霊場として祖師信仰（日蓮信仰）の根幹に位置していることは周知のことである。山内における信仰の地域、つまり参詣場所については、従来本堂域、御廟所域、奥の院域、七面山域、の四箇所に区別されている。この各地域における身延山信仰の位置づけに関しては、⁽¹⁾はかつて考察した。

しかし、近年、身延山内史料の発掘や身延町教育委員会が編集した『身延山久遠寺史料調査報告書』が刊行されたことにより、身延山内の彫刻（仏像等）・絵画・典籍・金石文をはじめとした、従来明らかでなかった資料が紹介され、身延山史を紐解く鍵となった。研究視角としても、従来は堂宇を中心に、その中にある資料が調査・活用されたが、この報告書は堂宇と堂宇を結ぶ道に注目し、動線に関わる資料を掲載していることは評価されよう。同報告書の金石文の項は、身延

山内の総門域、三門域、御廟所域、本堂域、上の山域、奥の院域、七面山域、といった七箇所に分けて関係資料が紹介されているが、特に信仰関係資料としては、総門・三門域、御廟所域、奥の院域、七面山域の中に確認できる。そして、総門域・三門域・本堂域、本堂域・奥の院域といった道程にある資料が注目できよう。

本稿は、身延山信仰の信仰圏を探る手段として、近世中期を中心に、その時代の信仰者の居住地及び階層に着目し、検討していく。そして、身延山信仰のそれぞれの地域に伝わる資料を紹介し、身延山における参詣場所の成立時期と身延山信仰高揚の時期についてみていくことにしたい。

一 近世中期の身延山と参詣場所

近世中期の身延山は、祖師信仰の高揚とともに参詣者が増加したが、併せて七面山信仰の高揚とともに奥の院や七面山に至る参詣道が開発された。⁽²⁾七面山への参詣道は、後述する

ように大きく二つのルートがあるが、上の山や妙石坊は身延山や七面山の参詣者が立ち寄る参詣場所であった。^③

そこで、上の山地域をまず概観してみたい。近世後期に身延山の参詣案内図として木版刷りで大量に印刷された「身延山絵図」^④をみると、やはり先述した七つの信仰域が描かれているが、上の山域に注目すると諸堂がいくつか確認できる。この参詣図からも、近世後期の上の山地域は、諸堂宇が整う身延山信仰の一参詣地として位置していたわけである。この時期の身延久遠寺三十一世住持であった日脱は、身延山中興の師と仰がれているが、身延山内に祈禱堂三十六坊を建立し、各坊に僧侶を置いて妙経を誦読させた。この祈禱堂三十六坊は、日脱が施主を募って建立した房舎で、上の山に十一房、東谷に三房、西谷に九房、南谷に三房、醍醐谷に三房、田代に六房、中谷に三房、稲荷に三房、棚沢に三房と山内各所に建立された。この各坊舎の施主を階層別にみると、次の表1のようになる。

（表1）祈禱堂三十六房施主の階層

階層	房数	房名
武家	六房	円光房、春窓房、清閑房、松玄房、長寿房、真善房
武家の女性	十二房	瑞光房、芳心房、慶雲房、妙応房、貞俊房、春光房、仁浄房、芳春房

女性	僧侶	庶民	不明
一房	四房	八房	三房
高雲房、長松房、清輝房、中山房、仙台房	見塔房、法蘭房、顕成房、本学房、忍脱房	宗幸房、渋谷房、常栄房、観松房、浄蓮房、定林房、実道房、宗賢房	長安房、清玉房、妙善房 ^⑤

これをみると明らかのように、武家の女性の施主が十二房と圧倒的に多い。その中には江戸城大奥女中梅の方とその侍女が建立した貞俊房、春光房があり、江戸城大奥女中の法華信仰もみられたことは注目できる。その他は武家や庶民、僧侶が施主となっているものであるが、庶民の住居は、大宮町（駿河国）、八代（甲斐国）、富士郡（駿河国）、精進川（駿河国）、江戸（武蔵国）といったことから身延山近隣の甲斐・駿河や江戸に住む人々の外護者が確認できるのである。

二 上の山域

身延本院から奥の院思親閣に至る道筋に堂宇や資料が点在している。これには次の二つのルートが存在する。堂宇に関する資料や紀行文等からみていくと、次の参詣路が確認できる。

ルート① 本堂く鬼子母神堂く丈六堂く三光堂く奥の院
ルート② 御廟所く妙石坊く松樹庵く願満稻荷く奥の院
この中でも参詣道の地域として注目され、信仰関係資料が
伝来しているのは、妙石坊域、上の山域、奥の院山頂域であ
る。そこで、これらの参詣場所と信徒層について、ルート①
に着眼してみていくことにしよう。

本堂から裏手で、奥の院に至る参詣道の中に上の山という
地域が存在するが、寛文期に諸堂宇が移転され、身延山信仰
の一地域として存在したことが明らかとなっている。奥の院
への参詣道における堂宇や参拝場所の存在は、主に次の三つ
の資料から確認できる。

資料①「身延山絵図」 近世後期

本堂く上の山（番神宮く五重塔く稚児文殊く一乗塔く
経蔵く丈六堂く大黒堂く三光堂）く鉄仏く常題目堂
く水屋く東照宮く奥の院

資料②「身延山図経」 近世後期

本堂く上の山（八幡宮く五重塔く鬼子母神堂く文殊
水く稚児文殊く一乗塔く丈六堂く大黒堂く三光堂く鉄仏
く法久庵く富士岩く聚遠観く東照宮く龍口く仙薬
水く奥の院

資料③「身延鑑」 近世中期

本堂く天照・八幡宮く五重塔く羅刹堂く一切経蔵

近世中期における身延山信仰と信仰圏（望月）

く稚児宮く丈六釈迦堂く大黒堂く三光堂く東照権
現宮く題目堂（常照堂）く男蛇石く女蛇石く腰掛
石く清浄水（日朗井戸）く風穴く奥の院

それぞれの記載は多少違うが、上の山地域の堂宇はほぼ同
じであり、近世中期以降、大きな移転はみられない。特に、
身延山の参詣案内となった「身延山絵図」では、本堂域を図
の中心部として上部の中央に上の山域、その右に奥の院域、
左上部に七面山域と三つの山となった地域が参詣場所として
描かれていることが特徴といえる。貞享元年（一六八四）の
「身延山古図」では、上の山は「身延山絵図」のように独立
した山としては描かれておらず、奥の院の参詣途中の参詣場
所として描かれている^⑦。つまり、近世中期に成立した上の山
地域が近世後期には霊場として定着していたことを物語って
いるのである。

この中で、上の山域に着目してみると、近世初頭には堂宇
の存在は限られていたが、『身延山諸堂記』によると、近世
中期に次の表2の堂宇が移転されたことが知られる。

（表2）上の山に移転した堂宇一覧

堂宇名	移転年月日	元の場所	久遠寺住持名
刹堂	寛文二年	祖師堂の上	二十八世日眞
五重塔	寛文三年	位牌堂前	二十八世日眞
丈六釈迦堂	寛文四年	二天門側	二十八世日眞

三光堂 寛文五年 祖師堂と位牌堂の間 二十八世日奠

一切経蔵 寛文七年 本堂 二十八世日奠

大黒堂 (寛文年間) 祖師堂上の山 二十八世日奠

番神社 (寛文年間) 祈禱堂前 二十八世日奠

二重宝塔 寛文十年 新造 二十九世日蓮

常經堂 寛文十二年 新造 二十九世日蓮

つまり、寛文期の久遠寺二十八世日奠・二十九世日蓮代に

本堂・祖師堂域堂宇の一部が上の山域に移転し、身延山信仰の一地域として成立し、参詣案内記や参詣絵図に一参詣場所として位置づけられたことが窺えるのである。

次に上の山の大光坊における堂宇・仏像等の建立時期についてみてみよう。^⑧

①大光坊・三光堂 日天子・月天子立像銘文 寛文五年（一六六五）

(日天子像背面朱漆書銘) 「南無大日天王 / □甲府宰相綱重同姫君息災延命子孫繁栄也 / 寛文五年十月十五日 / 日奠 (花押)」

(月天子像背面朱漆書銘) 「南無大月天 □ / □甲府宰相綱重同姫君息災延命子孫繁栄 / 寛文五年十月十五日 / 日奠 (花押)」

これによれば、寛文五年（一六六五）に日天子・月天子が造立され、表2の如く、同年に三光堂の堂宇が建立されたことがわかる。また、年不詳であるが、「身延山奥の院宝塔施

入面々」として「御本丸御祈禱」や「二御丸御祈禱」の記載があることから、江戸城大奥女中が寄進者として名前を列ねていたことが知られる。つまり、三光堂も丈六堂と同じく江戸市域を中心とする各地の寄進者によって建立された堂宇であったのである。

三 妙石坊域

近世における妙石坊と信徒層との関係については、既に奥野本洋氏の論考がある。^⑩ ここでは、近世中期の妙石坊住持と信徒との関係について考察され、江戸市域を中心とする庶民の信仰が明らかになっている。^⑪ ここでは、その信仰者の居住地・階層について、身延山信仰の各場所との関係や参詣道とのつながりから考えてみたい。

妙石坊内にある信仰関係資料の中から、金石文を中心にピックアップしてみると、次のようになる。

①祖師像台座銘「宗善施主講中十一人 / 権九郎十二日講中 / 釘屋八郎兵衛講中 / 十一日講中妙因」

②祖師堂・祈願札銘 宝永五年（二七〇八）「祖師講中 / 八日講中 / 九日講中 / 一日女講中 / 一三日講中 / 一九日講中 / 願主 江戸浅草東中町 萬屋徳兵衛 / 若松屋茂兵衛」

③道標銘 宝暦五年（二七五五）十一月日「駿河国富士郡賀嶋河成嶋村 望月與平治嘉治」

④清澄堂・金丸銘 明和六年（二七六九）六月吉祥日「施主尾張国名古屋桑名町田中新六」

⑤江戸大火死者精霊碑銘 天保五年（二八三四）「神田皆川町糟屋弥五右衛門」

⑥妙法堂・外陣坐像台座銘 嘉永六年（二八五三）「歟沢宿青柳徳左衛門／施主河住 七三之丞／樋口吉左衛門」

⑦妙法堂・日蓮聖人台座銘 年月日未詳「願主 江戸浅草山口千枝」

⑧法太郎像台座上覺裏墨書銘 年月日未詳「江戸浅草／山口千枝／施主／澤田和助」

⑨妙太郎像台座上覺裏墨書銘 年月日未詳「澤田和助／尊像願主／江戸浅草住人／山口千枝」

⑩祖師堂・銅灯籠銘 万延元年（二八六〇）四月吉祥日「甲斐国大野村松田屋惣左衛門」

⑪日蓮聖人五百五十遠忌題目塔銘 文政十一年（二八二八）三月吉日「施主 浅草堂前 須田すみ／須田せい／坂口妻／高村きせ／浅草堂前十六名／根津門前三名／牛込六名

／深川佃町・松村町・萱屋町五名／神田二名／浅草堂前三名／蔵前二名／駿河国清水一名／蒲原一名／岩淵一名」

これらからも、江戸講中や身延近隣地域の人々の存在が確認できるが、資料的には、元禄・宝永期、そして幕末期に集中している。浅草の住人は近世を通じて妙石坊の諸堂宇の寄

進者となっているのである。

四 奥の院域

次に、奥の院域における信仰関係資料について、山頂付近の資料を紹介してみよう。

①祖師堂内日蓮像

寛永十三年（二六三六）五月十三日衣更

享保六年（一七二二）京都仏師伊藤勝之丞によって再興

②祖師堂内六老僧像（日昭・日朗・日興・日向・日持）延宝八年（一六八〇）九月十三日 久遠寺三十一世日脱判形¹³

③妙日・妙蓮像が再興¹⁴ 天和二年（一六八二）四月十九日 日脱判形

④供養塔 天明二年（一七八二）五月吉日

高祖大菩薩御書にはく、教主釈尊之一大事之秘法を靈鷲山尔志て相傳し、日蓮が肉團之中尔加久し持てり、かかる不思議乃法華經之行者之住所なれば、いかでか靈山浄土におとる遍ぎや、此みぎり尔のぞまんともがらハ、無始之罪障を消滅して三業之悪てんじて三徳とならん。彼月氏之靈鷲山ハ本朝此身延之嶺な利、南無妙法蓮華經身延奥之院 日蓮（花押）

ここには大坂河内屋弥兵衛家族の家内安全・子孫繁栄の祈願が記されているが、日蓮報恩の目的が主であり、これに加

えて先祖代々の供養が込められていた。また、身延山に登詣することによる、個人の罪障消滅、三徳の教えが語られ、日蓮の靈性が強調されているのが特徴といえよう。

まとめに

身延山内における信仰の地域は、総門域、三門域、御廟所域、本堂域、奥の院域、七面山域があるが、近世中期になると、二十八世日蓮の施策もあつてか、上の山域を中心に諸堂が集められ、身延山信仰の中心となる一地域になっていったことが注目される点といえよう。特に、寛文期の上の山は本堂域からの堂宇の移転も伴つて、本堂域の背後に聳える山の各所に諸堂宇が点在し、荘厳な参詣場所となつていたのである。この上の山地域も、奥の院に参詣する途中であり、奥の院や七面山参拝者の増加とともに庶民の信仰対象となつていったことが考えられる。

奥の院参詣道からみた上の山域は、寛文く延宝期に奥の院への主要ルートとして再開発され、発展していくことになつた。一方、妙石坊を通る参詣道は、日蓮と龍女の伝説が定着していくに伴い、龍女教化の高座石が七面山霊場への基点として位置づけられていき、元禄期の七面信仰の高揚とともに七面山信仰の重要な参詣場所として形成されていったのである。

妙石坊の金石文や信仰関係資料から分析した結果、信仰の地域としては、全体的に江戸市域が多く、庶民層から江戸城大奥女中の存在も確認された。名古屋や大坂といった都市部の人々もみられ、主に都市部を中心に身延山信仰が広まりをみせていたことがいえるのである。金石文をはじめとする資料に登場してくる人物の階層は、庶民が主であるが、どの職種の人々かは知ることができない。しかし、江戸市域においては、浅草、日本橋、深川といった地域の肩書を持った町人が多く、近世中期から幕末期まで盛んに身延山に登詣し、信仰の証しとしての題目塔を建立し、身延山の年中行事に参加したのである。また、扁額や仏具銘からして、堂宇や荘厳具の寄進行為を積極的に行つていたことが知られる。

今後の課題として、身延山内の信仰地域の成立時期と各地域の相互関係があげられるが、これについては稿をあらためたい。

1 拙著『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』において紹介している。

2 拙著前掲書。

3 近世の身延山の堂宇や参詣道に関する基本文献は、「身延山諸堂記」、「身延山坊跡録」、「身延山絵図」、「身延山図経」等がある。後者三点の刊行年については、北沢光昭『身延山図経の研究』、藤井日光編著『身延鑑』解題を参照された。

い。

- 4 身延山久遠寺身延文庫所蔵。
- 5 『身延山史』一五四～一五六頁。
- 6 『身延山房跡録』身延文庫所蔵。
- 7 身延別院所蔵「甲州身延山久遠寺絵図」（藤井日光編著『身延鑑』所収）。
- 8 身延町教育委員会編『身延山久遠寺史料調査報告書』平成十六年三月刊。以下特に註記しない史料は同史料集掲載のものとする。
- 9 相輪塔に関しては、註（5）報告書において坂田正一氏が史料紹介している。
- 10 奥野本洋「江戸中期における諸堂宇整備について」学禅院日逢を中心として」（『棲神』六六号所収）が主なものである。
- 11 拙稿「江戸の身延山信仰」（北原進編『近世の地域支配と文化』所収）。
- 12 「身延山諸堂記」（『棲神』五六号掲載）。
- 13 右同。
- 14 註（8）と同。同史料集には「延寶八年七月十七日／修徳院道興日行／作之」とある。
- 15 註（12）と同。

〈キーワード〉 身延山、上の山、妙石坊

（身延山大学教授・文博）

近世中期における身延山信仰と信仰圏（望 月）

新刊紹介

慶心義塾大学附属研究所 斯道文庫 編

『中世聖徳太子伝集成』全五巻

B五版・約二、五〇〇頁・定価九八、〇〇〇円
勉誠出版・二〇〇五年五月

48. The Hell Picture of Nozoki Karakuri

Kiyoshi NEI

Nozoki Karakuri is a street performance. It took place in the 17th century. Spectators watch moving dolls and pictures, and so on, through a glass window in a box. Among the painted pictures, many were drawn from the idea of Buddhist Hell and Paradise. Nozoki Karakuri has been preserved in Fukae town, Nagasaki prefecture. It is one of the cultural treasures of Japanese Buddhism.

49. Religion of Minobusan and religion area in modern period

Shinchō MOCHIZUKI

Minobusan Kuonji-temple is Nichiren's hallowed ground. Nichiren lived in Minobusan in over nine years. Minobusan's hallowed ground was formed in medieval time.

This paper inquires into the time and places of worship in Minobusan region on the basis of their relevant materials.

50. Fujaku's View of the Huayan Thought

Ryō NISHIMURA

Fujaku (1707-1781) was a scholar-monk representative of the early modern period in Japan. He idealized the times of the historical Buddha and as a Vinaya monk practiced the Four-Part Vinaya. Scholarship to date has defined Fujaku as a heretic from the traditional doctrines. Huayan scholars have also criticized Fujaku's Huayan thinking, claiming that he is biased toward practice.

Fujaku considered the five kinds of teaching classified by the Huayan as something practiced by himself over a distance of many lives. The Huayan philosophy has supported his practice from the present time to the time of his becoming a Buddha in the distant future. Fujaku's approach integrates